

千鳥町の

人助け稲荷のキツネ

平成三年一月一日号

富士南地区の千鳥町に「人助け稲荷」と呼ばれる小さなほころがあります。今回と次回は、千鳥町の石川雅也さんに伺った、このキツネのお話です。

命を救う稲荷さん

人助け稲荷の周辺は、稲荷島と呼ばれています。今は小さな林ですが、昔はうっそうとした森があり、キツネが住んでいました。森は夜でも目を凝らせば見え、津波や洪水で逃

げ遅れた人は皆、この森へ逃げました。

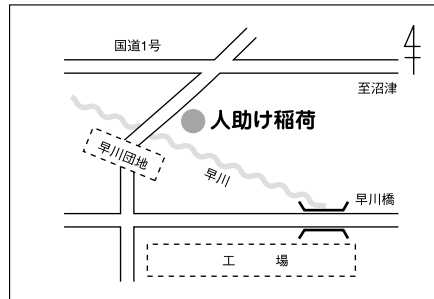
森の松につかまれば助かったので、稲荷さんはいっしょか人助け稲荷と呼ぶようになりました。

一人多いぞV

昭和の初めごろのことです。

浜で、夜、五・六人の人が投げ網を打っていました。寒い夜でしたので、それぞれが持ってきたわらを河原木と一緒に燃やしては、暖をとりました。

パチパチとわらはよく燃え、わらに残っていたもみはげら菓子のようになって、香ばしい香りを漂わせました。





ふと気がつくくと、薄暗い中で人が一人多くなっていました。「二人、二人、三人…おや」なんと若く美しい女の人が仲間になっているではありませんか。

火に当たっていたみんなは、なぜかほっとして話し込み、楽しく過ごしました。

はぜら菓子が好き

「さて、もう一網打つかい」そう言ってみんなは、女の人を残して海に向かいました。何げなく振り返った一人は、思わず目を見張りました。

「おい、見ろよ。ありやあイッケンだぜ」

指さす方を見ると、女の人が着物のすそを乱し、頭を下げてはぜら菓子を食べているではありませんか。そして、もつとよく見ると、それはキツネでした。キツネは、もみのはぜら菓子が好物だったのです。なお、イッケンとは、田子浦でキツネのことを言ったのです。

語ってくれた方 石川雅也さん